

Der Wind

(風)

湘南日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan

事務局: 〒251-0025 藤沢市鵠沼石上1-1-1

江ノ電第2ビル7F

TEL: 0466-26-3028 FAX: 0466-27-5091

E-mail: jdgs@jcom.home.ne http://jdg-shonan.ciao.jp/

2015年度全国日独協会連合会年次総会

4月17日～18日いわき市で開催された年次総会へ松野会長、三谷副会長が出席致しました。お二人の2日間にわたる総会報告は5頁に掲載しております。

☆ ☆ ☆

ケンペル・バーニー祭へ参加



祝辞を述べる松野会長と湘南日独協会の
のプラカードを持つ会員関口茂雄氏

4月12日(日)元箱根で開催された、第29回ケンペル・バーニー祭へ、4月例会として参加しました。午前8時40分JR小田原駅、小田原在住の会員関口茂雄氏と中村武夫氏の出迎えを受け、バスにて元箱根へ向かう、総勢12名。

式典はケンペルの著した「日本誌」の序文を碑文として、バーニーの建てた記念碑の前で行われ、松野会長も祝辞を述べられ、子どもたちのバンドの演奏と合唱で「箱根八里」を参列者も歌い終了。その後昼食と箱根の植物の講話があり、午後の部は、箱根神社の宝物殿へ移動、普段は一般公開していない「神宝」の説明を受けました。これらはケンペルの「江戸参府旅行日記」に記載されている「珍しい宝物」とのことでありました。

その後小田原へ戻り、小田原の新入会員の福泉さんと交えて、駅前で愉快的懇親会を開き散会しました。

エンゲルベルト・ケンペル Engelbert Kömpfer の故郷北ドイツのレムゴの、ケンペル協会＝日独友好の会と長年相互訪問等の交流のある、「ケンペル・バーニーを讀める会」(川崎英憲会長)との今後の友好関係を築くことが出来ました。お世話頂いた関口さん、中村さんのお二人に感謝いたします。(なお5頁に続きがあります)

湘南日独協会の行事予定

■ Singen wir zusammen 歌で楽しむドイツ語第29回 テーマ「Liebe-愛」

日時 5月17日(日) 15:00～16:30

会場 藤沢商工会議所ミナパーク

会費 1,000円

■ Schwatzererei am Stammtisch 第10回

テーマ 「Das Verhältnis zwischen Menschen und Tieren-人と動物との関わり」

日時 5月26日(火) 15:00～17:00

会場 藤沢商工会議所ミナパーク

会費 1,000円

■ 5月例会 講演会

「原発と海」

原発が海洋へ及ぼす影響と汚染について語ります。

講師 東北大学名誉教授 川崎 健 氏

海洋学と自然環境の権威です

日時 5月31日(日) 14:30～16:00

会場 湘南アカデミア(江ノ電第2ビル7F)

会費 1,000円

講演終了後懇親会(別料金)を予定しています

■ Singen wir zusammen 歌で楽しむドイツ語第30回

テーマ 未定

日時 6月14日(日) 15:00～16:30

会場 藤沢商工会議所ミナパーク

会費 1,000円

新入会員紹介

敬称略

福住 誠 田中幹夫 本澤 交(よしみ)

行事予定続き

■Schwatzerei am Stammtisch 第12回

テーマ 未定

日時 6月23日(火) 15:00~17:00

会場 藤沢商工会議所ミナパーク

会費 1,000円

■6月例会 講演とビールと音楽と

講演 「ビール純粋令から499年/地域色溢れる
ドイツビール」

講師 ビール輸入商社社長 友田圭治氏

講演の後、本場ドイツのビールを飲みながら、
食事歓談また、全員の合唱もあります

日時 6月28日(日) 14:00~17:30

会場 音楽酒場“BOCHY BOCHY”

13:30 JR茅ヶ崎駅改札集合、徒歩5分

会費 4,500円

なお会場の関係で定員30名です

■Singen wir zusammen 歌で楽しむドイツ語第31回

テーマ 未定

日時 7月12日(日) 15:00~16:30

会場 藤沢商工会議所ミナパーク

会費 1,000円

■Schwatzerei am Stammtisch 第13回

テーマ 未定

日時 7月21日(火) 15:00~17:00

会場 藤沢商工会議所ミナパーク

会費 1,000円

■7月例会 講演会

「ドイツの指揮者への道」

講師 志賀トニオ氏

日本人の父とドイツ人の母を持ち、ピアノ、声楽、
指揮を学び、現在北ドイツのプレーマーハーフェン
歌劇場でコレペティトール兼指揮者として活躍して
います。

日時 7月26日(日) 14:00~16:00

会場 ふじさわ名店ビル6F Aホール

会費 1,000円

終了後懇親会(別会費)を予定しておりま

2015オクトーバーフェスト決定

10月4日(日) 18時~21時

会場 藤沢商工会議所ミナパーク

演奏 エーデルワイストリオ

混声合唱団「アムゼル」

司会 タベヤさんとフロリアン君

会費 6,000円



■10月例会 講演会

「第2次世界大戦終結から70年/

その歴史的意味と今日に及ぶドイツへの影響」

講師 関西外国語大学講師 他

ルードヴィヒ・パールケ氏

日時 10月25日(日) 14:15~15:45

会場 藤沢商工会議所ミナパーク会議室302

会費 1,000円

終了後懇親会(別会費)を予定しています

■11月例会 講演会

日時 11月29日(日)

■12月忘年会

日時 12月13日(日)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

♪♪ お知らせ

かまくらシンフォニエッタ演奏会

第15回 定期演奏会

日時 5月23日(土) 午後2時開演

会場 戸塚さくらプラザホール

曲目 ベートーヴェン：エグモント序曲

モーツアルト：ヴァイオリン協奏曲

第5番K219「トルコ風」他

入場券 1,500円 全席自由

詳細は同封のチラシをご覧ください

会費納入のお願い

3月会報に振込用紙を同封いたしました本年の会
費のお振込の未だお済みでない方は、急ぎお振込を
お願い致します。振込用紙のない方は郵便局の用紙
を使用次の講座へお振込下さい。

年会費 3,000円

口座番号 00210-9-22718

3月例会

講演「ドイツに渡った日本文化」を拝聴して
会員 廣川貴男



三月二十二日の湘南日独協会の催し物は、慶應義塾大学名誉教授・寺澤行忠氏を招聘しての講演であった。「ドイツに渡った日本文化」と題するもので、ドイツ各地に点在する日本文化関係の各種施設や活動状況等を紹介するという趣旨の講話である。日本庭園の所在地を始めとして、日本語、日本文学、日本史、仏教、茶道、日本映画、果てはマンガに至る迄、様々の講座を開設する大学や研究所について、その来歴、規模、教授陣、学生数等、広範に調査した報告書が資料として配布された。この緻密・微細なレポートは殆ど間然する所がない。氏ご自身がドイツを周遊して調査されたもので、都市ごと、施設ごと詳細を極めた内容が充溢している。満鉄調査部や興信所の調査、或いは浮気調査の探偵報告書でも、か程までに委曲を尽くすことはないであろう。

氏は元々、日本文学がご専門で、例えば西行の『山家集』を文献学的な立脚点から、多くの史料や写本を比較研究するといった地道で基礎的な学究活動を長年続けて来られた方である。斯かる碩学に、今回のテーマは些か畑違いの感もあるが、この点を会終了後の酒席でお尋ねしたところ、言下に“私の趣味です”と明言された。配布された資料中、殊の他、興味を惹いたのは、「日本文学作品のドイツ語訳作品数」という項目であった。芥川龍之介を首位に20位の小川洋子に到る迄、翻訳作品数の多い順に作家名が列挙されている。が、惜しい哉、作品名を書いていない。芥川の作品数が127とあるから、恐らく彼のほぼ全作品が翻訳されているのであろう。“ハイク（俳句）”がドイツに限らず欧州諸国に普及している事は寡聞にして知らなかった。季語や平仄・韻、音節数といった約束事は如何様に処理されているのだろうか。実物が提示されていないのが惜しまれる。

さはれ、日独間の文化交流は豊饒な歴史的蓄積がある。今回の講演は、日本からドイツへの流れが中心であったが、無論、その逆の流れもある。人的交流に局限すれば、戦国時代末期の慶長19年、ドイツ人・ミヒャエル・ホーライターが九州平戸に来たのを嚆矢とする。元禄3年、エンゲルベルト・ケンペルが来日する以前に、既に何人ものドイツ人が九州各地にいずれもオランダの東インド会社員として来ている。明治初年になると留学のため日本からドイツに渡る者が出て来る。明治4年9月の統計によると、渡航先は英米に次いでドイツが3番目に多い。

日本文化研究のために来日する外国人男性は若年者が多く、優秀な日本人女性と結婚して帰国するケースが多いという。群鶏中の一鶴を外国人に連れ去られ、残るは凡庸な凡百の凡婦ばかりになるぞ、と、氏は危機感を込めて日本の男子学生に警鐘を鳴らしているという。

擱筆の前に、独り善がりの世迷いの妄言を一言。ヨハン・ゼバスティアン・バッハ、アルブレヒト・デューラー、フリードリッヒ・ニーチェ、シュテファン・ツヴァイク・・・これらが私にとっての、ドイツ文化の総和である。



寺澤行忠先生



懇親会の様子

菩提樹をめぐって

会員 吉田克彦

日独修好 150 周年の記念樹

2011 年は日独修好 150 年の記念すべき年でした。ドイツ大使館からはその記念として菩提樹の苗が贈られてくることになり、その受け入れをしたことはまだ記憶に新しいと思います。この苗木は検疫の関係で福島県で育てたものが来るはずでした。ところがご承知の通り丁度東日本大震災にであり、苗木は全滅、急遽ドイツ本国から苗木 167 本が空輸されてくることになったのです。横浜に 3 本、湘南に 3 本、が贈られて来て鎌倉市、藤沢市、江ノ島電鉄(注)でそれぞれ植樹されました。この樹は間違いなく「せいよう菩提樹」でしょう。

仏陀の「菩提樹」

菩提樹といえば我々日本人には先ずお釈迦様を想い出します。お釈迦様はガヤー村の菩提樹の下で静かに座禅を組んで瞑想に入りました。悪魔が悟りを妨害する為に大軍を送ってきましたが、釈迦はこれをことごとく調伏し、瞑想開始から 49 日後の 12 月 8 日未明に悟りを開き、彼は「菩薩(修行者)」から「仏陀(覚醒者)」となったのでした。ガヤー村は後に仏陀が悟った場所として「ブッダガヤ」と呼ばれるようになったとか。この菩提樹は印度菩提樹で、熱帯性植物なので仏教が伝わった中国にも日本にも生育しないのです。

シューベルトの「菩提樹」

シューベルトの歌曲集「冬の旅」に「菩提樹」という曲があり日本でも大変親しまれています。ドイツの詩人ヴィルヘルム・ミュラーの詩集によるもので 24 曲中の 5 番目の曲ですが「冬の旅」のなかでも最も親しまれている曲ではないでしょうか。

1956 年(昭和 31 年)に封切られた西ドイツ映画に「菩提樹」というタイトルの音楽映画がありますが、この作品の中でアメリカへの亡命が出来るか否かのクライマックスシーンで歌うのがこの「菩提樹」で実に感動的な場面となっています。それならばドイツの国樹かなと思いきや、さにあらず、国樹は「オウシュウナラ」でした。

(注) 鎌倉川喜多映画記念館、藤沢市民会館、江ノ電江ノ島駅構内

泉にそひて、繁る菩提樹、
慕ひ往きては、
美(うま)し夢みつ、
幹には彫(ゑ)りぬ、
ゆかし言葉、
嬉悲(うれしかなし)に、
訪(と)ひしそのかげ。

訳詞は明治時代の訳詞家近藤朔風(さくふう：1880-1915)の手になるものです。彼の「菩提樹」「ローレライ」「野薔薇」などの訳詞はあまりにも有名ですが、35 歳余りで早世したこともあり、その業績も上記の数曲を除き遠い過去のものになってしまっています。クラシック歌曲の日本語化は原詩と関係ない替え歌が主流であった時代に、原詩に沿った訳詞を試み、その後 100 年も歌い継がれている名訳を残した朔風の偉大さを忘れてはならないでしょう。

「シューベルトの菩提樹」は

ドイツ語名 linden baum は
学名 Tilia miqueliana Maxim.

で、中国原産のシナノキ科の落葉高木。和名では「セイヨウボダイジュ」。6~7 月頃淡黄色の花が咲き、香りが高く蜜蜂の密源となります。インドボダイジュの代用として寺などに植えられ、仏教徒の呼び名「ボーディ・ブrikシャ」の漢訳「菩提樹」と名付けられたと言います。日本へは、臨済宗の開祖栄西が中国から持ち帰ったと伝えられる。日本では各地の仏教寺院によく植えられています。

「セイヨウボダイジュ」



2015年度全国日独協会連合会報告

報告者：松野 三谷

開催場所：いわき市勿来の関・吹風殿

議事は以下の通り

開会宣言 日独議員友好連盟副会長・岩城光英氏

開会の辞 木村敬三氏

挨拶 フォン・ヴェアテルン大使

いわき市長・清水敏男氏

星 一生家当主 星 昭光氏

旧陸奥岩城平藩16代 安藤 綾信氏

議事内容

承認事項

1. 茨城日独協会退会の件：承認された
2. 2014年度決算と2015年度予算案：承認された
3. 日独協会連合会創立50周年記念出版「生き生きとした友好関係ードイツと日本」配布の件：各日独協会に一冊は無償で配布された。それ以上欲しい場合は有償（一冊3000円）
4. 「ドイツと日本を結ぶ物ー日独修好150年に歴史」展示会【国立民族博物館主催】講演の件：承認された
5. 2016年連合会総会会場（恒例によれば東京）：承認された

報告事項

1. 2013年札幌総会における赤字補填の件は解決済みとの報告。
2. 2015年日独協会連合会総会とベルリン日独協会創立125周年記念式典参加旅行について報告。
3. 日独若者交流促進資金使用状況について報告。
4. 日本国内各地の日独協会からそれぞれの活動状況について報告。

基調講演

講師 早稲田大学学長代理・藁谷 友紀 教授

講演内容概略

- I 国家・民族とは何か II 統一国家としてのドイツ III 経済政策と共通政策

懇親会

環境水族館「アクアマリンふくしま」の館内

その他

会議の中で大使より日独両国の若者の交流が次の世代の交流を盛んにすることの重要性について意見が述べられたが、多くの出席者からも同発言が相次いだ。

ケンペル・バーニー祭参加

報告者：大久保 明



参加の皆さん

ケンペルの研究で名高い、ジョーゼフ・クライナー氏はオーストリア生まれで長年日本の研究で数々の活躍をされ功績を讃えられています。ケンペルに関する著書も多く、松野会長とは若い頃より兄弟のようなお付き合いがあります。これまでも湘南日独協会の例会で講演をして頂きましたが、お忙しい中今年も年内での講演の調整をさせて頂いております。



大勢の子どもたちも参加歌いました

私はここで思いがけぬ出会いを経験しました。2011年11月家内とトルコ・ツアーに参加、10日間一緒であった、今村昌明ご夫妻にお会いしたのです。更に、今村氏はケンペルの弟子（通訳）として歴史に名を残す今村源右衛門（英生）の8代目にあたるご子孫でした。

私がケンペルに関心を持ったのは、2013年湘南日独協会のドイツ旅行でドレスデンの郊外のビルニッツ宮殿で出会った巨大な日本由来のやぶつばきの樹（移動式ガラス温室で保護された）でした。その後そのつばきを題材にした小説「安永の椿」に出会い、今年に入り作者柄戸正氏とも親交を結んだところでした。この小説はスエーデンの学者がケンペル同様、東インド会社の医者として日本に滞在、密かな使命として、やぶつばきを4本ヨーロッパに運んだ話です。この中にケンペルについての記載があり、（8頁続く）

寄稿

Die Rote Katze 赤毛の猫 (前号よりの続き)

Luise Rinser ルイーゼ・リンザー 1948

湘南日独協会ドイツ語講座「原書講読」コースの
皆さんの翻訳です。

山崎正(総括) 小田武司 御木理恵 森長京子

Sie ist immer fetter geworden, und eigentlich war es eine schöne Katze, glaub ich. Und dann ist der Winter sechsundvierzig auf siebenundvierzig gekommen. Da haben wir wirklich kaum mehr was zu essen gehabt. Es hat ein paar Wochen lang kein Gramm Fleisch gegeben und nur gefrorene Kartoffeln, und die Kleider haben nur so geschlottert an uns. Und einmal hat Leni ein Stück Brot gestohlen beim Bäcker vor Hunger. Aber das weiß nur ich. Und Anfang Februar, da hab ich zur Mutter gesagt: „Jetzt schlachten wir das Vieh.“ – „Was für ein Vieh?“ hat sie gefragt und hat mich scharf angeschaut. „Die Katze halt“, hab ich gesagt und hab gleichgültig getan, aber ich hab schon gewußt, was kommt. Sie sind alle über mich hergefallen. „Was? Unsere Katze? Schämst du dich nicht?“ – „Nein“, hab ich gesagt, „ich schäm mich nicht. Wir haben sie von unserem Essen gemästet, und sie ist fett wie ein Spanferkel, jung ist sie auch noch, also?“ Aber Leni hat anfangen zu heulen, und Peter hat mir unterm Tisch einen Fußtritt gegeben, und Mutter hat traurig gesagt: „Daß du so ein böses Herz hast, hab ich nicht geglaubt.“ Die Katze ist auf dem Herd gesessen und hat geschlafen. Sie war wirklich ganz rund und sie war so faul, daß sie kaum mehr aus dem Haus zu jagen war. Wie es dann im April keine Kartoffeln mehr gegeben hat, da haben wir nicht mehr gewußt, was wir essen sollen. Eines Tages, ich war schon ganz verrückt, da hab ich sie mir vorgenommen und hab gesagt: „Also hör mal, wir haben nichts mehr, siehst du das nicht ein?“ Und ich hab ihr die leere Kartoffelkiste gezeigt und den leeren Brotkasten. „Geh fort“, hab ich ihr gesagt, „du siehst ja, wie's bei uns ist.“ Aber sie hat nur geblinzelt und sich auf dem Herd herumgedreht.



作者 Luise Rinser は 1911 年生まれのドイツの小説家。ミュンヘン大学で心理学、教育学を学び、小学校教師を経て作家生活に入る。ナチスに対する反逆罪で、投獄の経験を持つ。

猫はますます太ってきた。もともと美しい猫だったのだろうと僕は思った。それから 1946 年から 47 年にかけての冬がやってきた。僕達は本当に食べる物が手に入らなくなった。二、三週間のあいだ凍ったジャガイモの他は 1 グラムの肉も手に入らなくなり、僕達の着ている服はだぶだぶになった。たった一回だけだったが、レニーが空腹のあまりパン屋でパンを一個盗んだ。しかし、それを知っているのは僕だけだ。二月のはじめ、僕は母に「もう僕達の家畜を屠殺しようよ」と云った。母は「家畜って?」と云い鋭い目で僕を睨んだ。「猫に決まってるじゃないか」と僕はさりげなく云ったつもりだった。しかし、もちろん僕はそのあと何がおきるかは、とっくに分かっていた。家族の全員が僕を激しく非難した。「なんですって、私達の猫をですって、あんたは恥ずかしいと思わないの?」「いや、僕は恥ずかしいとは思わない、僕達は猫に食べ物をやった。それで猫は小豚のように太った。その上、猫はまだ若い、だから…」レニーは大声で泣き始めた。そしてペーターはテーブルの下で僕を足で蹴とばした。そして母は「あんたがそんなに根性が曲ってるとは思ってもみなかったよ」と悲しげに云った。猫はかまどの上に横たわって眠っていた。猫は丸まると太り、怠け癖がついて、食物を漁るため家から出ることはもう全くなかった。四月になり、ジャガイモももう手に入らなくなり、僕達は何を食べたらよいのか分からなくなった。ある日のこと僕はもうすっかり気がおかしくなって、猫に云い聞かした。「まあ、聴けよ、僕達はもう食べる物は何もないんだよ。お前にはそれがわからないのかい?」と云って猫に空のジャガイモの箱と空のパンの入れ物を見せた。「どこかへ行ってくれよ、僕達のところがどんな状態かわかるだろう」と云った。しかし猫はただ瞬きをしただけで、かまどの上で寝返りをうった。

Da hab ich vor Zorn geheult und auf den Küchentisch geschlagen. Aber sie hat sich nicht darum gekümmert. Da hab ich sie gepackt und untern Arm genommen. Es war schon ein bißchen dunkel draußen, und die Kleinen waren mit der Mutter fort, Kohlen am Bahndamm zusammensuchen. Das rote Vieh war so faul, daß es sich einfach forttragen hat lassen. Ich bin an den Fluß gegangen. Auf einmal ist mir ein Mann begegnet, der hat gefragt, ob ich die Katze verkauf. „Ja“, hab ich gesagt, und hab mich schon gefreut. Aber er hat nur gelacht und ist weitergegangen. Und dann war ich auf einmal am Fluß. Da war Treibeis und Nebel und kalt war es. Da hat sich die Katze ganz nah an mich gekuschelt, und dann hab ich sie gestreichelt und mit ihr geredet. „Ich kann das nicht mehr sehen“, hab ich ihr gesagt, „es geht nicht, daß meine Geschwister hungern, und du bist fett, ich kann das einfach nicht mehr mit ansehen.“ Und auf einmal hab ich ganz laut geschrien, und dann hab's ich das rote Vieh an den Hinterläufen genommen und habs an einen Baumstamm geschlagen. Aber sie hat bloß geschrien. Tot war sie noch lange nicht. Da hab ich sie an eine Eisscholle gehaut, aber davon hat sie nur ein Loch im Kopf bekommen, und da ist das Blut herausgeflossen, und überall im Schnee waren dunkle Flecken. Sie hat geschrien wie ein Kind. Ich hätt gern aufgehört, aber jetzt hab ich's schon fertig tun müssen. Ich hab sie immer wieder an die Eisscholle geschlagen, es hat gekracht, ich weiß nicht, ob es ihre Knochen waren oder das Eis, und sie war immer noch nicht tot. Eine Katze hat sieben Leben, sagen die Leute, aber die hat mehr gehabt. Bei jedem Schlag hat sie laut geschrien, und auf einmal hab ich auch geschrien, und ich war ganz naß vor Schweiß bei aller Kälte. Aber einmal war sie dann doch tot. Da hab ich sie in den Fluß geworfen und hab mir meine Hände im Schnee gewaschen, und wie ich noch einmal nach dem Vieh schau, da schwimmt es schon weit draußen mitten unter den Eisschollen, dann war es im Nebel verschwunden. Dann hat mich gefroren, aber ich hab noch nicht heimgehen mögen. Ich bin noch in der Stadt herumgelaufen, aber dann bin ich

so mit der Katze in der Hand und bin zum Fluß gegangen. Da hab ich sie an den Eisschollen gehaut, aber davon hat sie nur ein Loch im Kopf bekommen, und da ist das Blut herausgeflossen, und überall im Schnee waren dunkle Flecken. Sie hat geschrien wie ein Kind. Ich hätt gern aufgehört, aber jetzt hab ich's schon fertig tun müssen. Ich hab sie immer wieder an die Eisscholle geschlagen, es hat gekracht, ich weiß nicht, ob es ihre Knochen waren oder das Eis, und sie war immer noch nicht tot. Eine Katze hat sieben Leben, sagen die Leute, aber die hat mehr gehabt. Bei jedem Schlag hat sie laut geschrien, und auf einmal hab ich auch geschrien, und ich war ganz naß vor Schweiß bei aller Kälte. Aber einmal war sie dann doch tot. Da hab ich sie in den Fluß geworfen und hab mir meine Hände im Schnee gewaschen, und wie ich noch einmal nach dem Vieh schau, da schwimmt es schon weit draußen mitten unter den Eisschollen, dann war es im Nebel verschwunden. Dann hat mich gefroren, aber ich hab noch nicht heimgehen mögen. Ich bin noch in der Stadt herumgelaufen, aber dann bin ich

そこで僕は怒りのあまりどなりちらして、調理台を叩いた。しかし、それにもかかわらず猫は気にならなかった。そこで僕は猫を捕まえて腕の下にかかえた。もう外は少し薄暗くなっており、妹や弟は母と一緒に鉄道の線路わきに落ちた石炭を探しに行つて家にいなかった。赤い猫は怠けものなので、簡単に運ぶことができた。僕は川の方に歩いて行つた。たまたま一人の男に出会つた。彼は僕がこの猫を売る気があるかと尋ねた。僕は「はい」と答え、嬉しくなつた。しかし、彼はただ笑つただけで行つてしまつた。そして、それからすぐに川の畔に着いてしまつた。川には氷が流れており、霧がかかつていて寒かつた。猫は僕にすっかり身をまかせてされるまゝになっていた。僕は猫を撫でながら話しかけた。「僕はもう見ていられないんだよ。僕の妹や弟は飢えていて、お前は太っている、これは間違っているよね。僕はこれ以上見てられないんだよ」僕はいきなり大声を上げながら、猫の後脚を掴まえて、木の幹に打ちつけた。しかし、猫は叫んだだけで、なかなか死ななかつた。そこで僕は猫を氷の塊りに叩きつけた。猫の頭が割れ、血が迸り出た。そしていたる所雪は赤黒く汚れた。猫は子供のような声で悲鳴をあげた。僕は止められるものなら止めたかつたが、とにかく始末をつけなければならなかつた。僕は繰り返えし猫を氷の塊りに打ちつけた。そのたびにパキパキと音を立てたが、それが猫の骨が砕ける音なのか氷の砕ける音なのか僕には分からなかつた。それでもなお猫は死ななかつた。世間では猫は七つの生命を持っていると云うが、この猫はもっと持っていた。打ちつける度に猫は大きな悲鳴をあげた。僕もいきなり大声で叫んだ。ひどい寒さにかかわらず汗をびっしょりかいていた。猫はどうとう死んだ。そこで僕は猫を流れに投げこみ、雪で手を洗い、そしてもう一度だけ猫がどうなつたかを見たとき、猫は氷の間を縫つてもう遠く流れ去り、霧の中に消えていた。僕は非常に寒かつたが、まだ家に帰る気にはなれなかつた。僕はなお街の中を

doch heimgegangen. „Was hast du denn?“ hat die Mutter gefragt, „du bist ja käsweiß. Und was ist das für Blut an deiner Jacke?“ — „Ich hab Nasenbluten gehabt“, hab ich gesagt. Sie hat mich nicht angeschaut und ist an den Herd gegangen und hat mir Pfefferminztee gemacht.

Auf einmal ist mir schlecht geworden, da hab ich schnell hinausgehen müssen, dann bin ich gleich ins Bett gegangen. Später ist die Mutter gekommen und hat ganz ruhig gesagt: „Ich versteh dich schon. Denk nimmer dran.“ Aber nachher hab ich Peter und Leni die halbe Nacht unterm Kissen heulen hören. Und jetzt weiß ich nicht, ob es richtig war, daß ich das rote Biest umgebracht hab. Eigentlich frißt so ein Tier doch gar nicht viel.

うろついていたが、結局、家に帰った。「一体何があったの、真っ青な顔をして、上着の血は何んなの？」と母は尋ねた。「鼻血が出たんだ」と答えた。母は僕を見なかった。そして、かまどへ行って、僕にペパーミント茶を淹れてくれた。突然僕は気分が悪くなり、急いで外に出て行かなければならなかった。その後、すぐにベッドにもぐりこんだ。しばらくして、母が来て「あんたの気持ちはよく分かっていますよ、考えるのはもうお止めなさい」と静かに云った。その後ペーターとレニーが夜半過ぎまで、枕の下で大声で泣くのが聞こえてきた。今になってみると、あの赤毛の奴を殺したことが正しかったかどうか僕には分からない。猫のような動物は、どっちみちそうたくさん食べるわけではないのだから。

湘南日独協会ドイツ語講座原書講読コースについて

ドイツ語講座には、初等文法と会話の学習を中心とするコースの他に、一通り文法を学習なさった方で、じっくりドイツの小説を読んでみたい方のために原書講読コースがあります。このコースでは、ヘルマン・ヘッセやルイーゼ・リンザーなど近代作家の短編、中編を読んでいます。文意の曖昧さを排除するため、常に文法に立ち戻って解釈するとともに、ドイツ人作家のものの考え方など行間の意味を汲み取る楽しみも味わっています。現在は、Hermann Hesse の Die Märchen (Suhrkamp-Verlag Taschenbuch 291) のうちから“Der Zwerg”という短編を読んでいます。また、副読本として、ドイツの Witze (機知に富んだ小話) を読んで楽しんでいます。一般にドイツ人は固くて融通が利かないと思われているので、「小話」を読んで、ドイツ人の別の一面を発見し、皆さん喜んでくれています。(原書講読 講師 松野義明)

ドイツ語講座の案内 (2015 年春夏期間)

初級 1	テキスト	International 1	講師	13:25~13:55(土)	*会場は何れの講座
初級 2	テキスト	International 2	初級・中級は	11:40~13:10(土)	も藤沢商工会議所
中級	テキスト	International 4	中川純子 Arndt·Oraf Frieze	11:00~11:30(土)	ミナパーク
原書講読	上記参照		松野 義明	10:00~11:30(土)	
ドイツ語講座に関するお問い合わせ 理事: 小田武司 Tel/Fax 0467-38-0920 E-Mail zvp03572@nifty.com					

(5 頁より続き)

彼の著した「日本誌」がどれほどその後のヨーロッパにおける日本研究の原動力となったのかを知りました。その上、彼の重要な役割を担った通訳の子孫と 10 日間とは言え、トルコと言う異文化の世界を旅したことの縁を感じました。今「安永の椿」の独訳「Das Band der Kamelie」を読んでいます。来年もケンペル・バーニー祭へ参加したいと考えています。

編集後記

- 3 月例会の寺澤先生のドイツでの日本文化、4 月例会のケンペル・バーニー祭参加。ケンペルのヨーロッパへの日本の紹介、共に興味深い刺激的な内容でした。
- 会報 Der Wind は 100 号となりました。1998 年創立から 67 号迄吉田克彦理事(事務局長)が編集をされ、68 号よりは久保が引き継ぎ、指導支援を頂き現在に至っています。吉田氏より特別寄稿を頂きましたが湘南日独協会の生き字引です。吉田氏に感謝申し上げますと共に今後のご指導ご支援をお願い申し上げます。久保